

平成26年3月9日  
現地説明会資料

## 三雲・井原遺跡南小路地区現地説明会資料

### 1. 調査成果の概要

- ・遺跡名 三雲・井原遺跡南小路地区（465番地）
- ・主な遺構 掘立柱建物1（弥生中期後半）、住居跡1（弥生後期）、大溝1（弥生中期前半に埋没）
- ・出土資料 弥生土器、石器類（石斧・石包丁等）
- ・ポイント
  - ①三雲・井原遺跡集落域の西端確認
  - ②弥生時代の大溝確認
  - ③掘立柱建物の確認

### 2. ポイント解説

#### ①三雲・井原遺跡集落域の西端確認

これまでの三雲・井原遺跡の調査は、三雲南小路王墓の構造確認、井原鎧溝遺跡の所在確認、下西地区の方形区画溝の確認等を目的として実施しており、どちらかといえば三雲井原遺跡の中心部分の調査が主体でした。

また、弥生時代の大規模集落は基本的に環濠といわれる濠・溝に囲まれていますが、今のところ、三雲・井原遺跡では環濠は未確認で（大溝は存在する）、西の瑞梅寺川、東の川原川が環濠の役割を果たしていたと考えられています。もちろん、遺跡は川に接するまで展開するのではなく、ある程度の氾濫原を挟みますが、その範囲は未調査であることから確定できており、踏査による地形変換点の確認や聞き取り調査によって推定されています（3ページ網かけ部分）。

平成24年度から遺跡の規模や広がりを確認するため、周辺域の調査を開始しましたが、氾濫原と接すると考えられていた地点を調査したところ、遺跡の広がりが確認されたため、今年度は氾濫原と考えられていた地点の調査を実施しました。

その結果、三雲465番地（南小路地区）については、西から10～20mの範囲で、段落ちが確認され、遺跡の西端部と判断しました。また、段落ち近くまで、柱穴など遺構が展開していることも確認されました。

#### ②弥生時代の大溝確認

調査区の東側では南北に延びる溝が一条確認されました。幅3.0m、深さ0.92～1.08mを測りますが、東に隣接する住居跡が、検出面から15cm程度で床面に達することから、大

溝の規模もより大きなものとなると想定されます。大溝の断面形はV字形で、人工の溝と判断されます。溝から出土した土器によると弥生時代前期末頃に掘削され、中期前半頃に埋没したと判断されます（紀元前2・3世紀）。

大溝の性格ですが、集落を囲む環濠の可能性も考えられますが、大溝の最下層には砂礫層があることから、実際に水が流れており、水路として用いられたことがわかります。環濠か否かは、大溝の延長の確認された段階での判断になります。

### ③掘立柱建物の確認

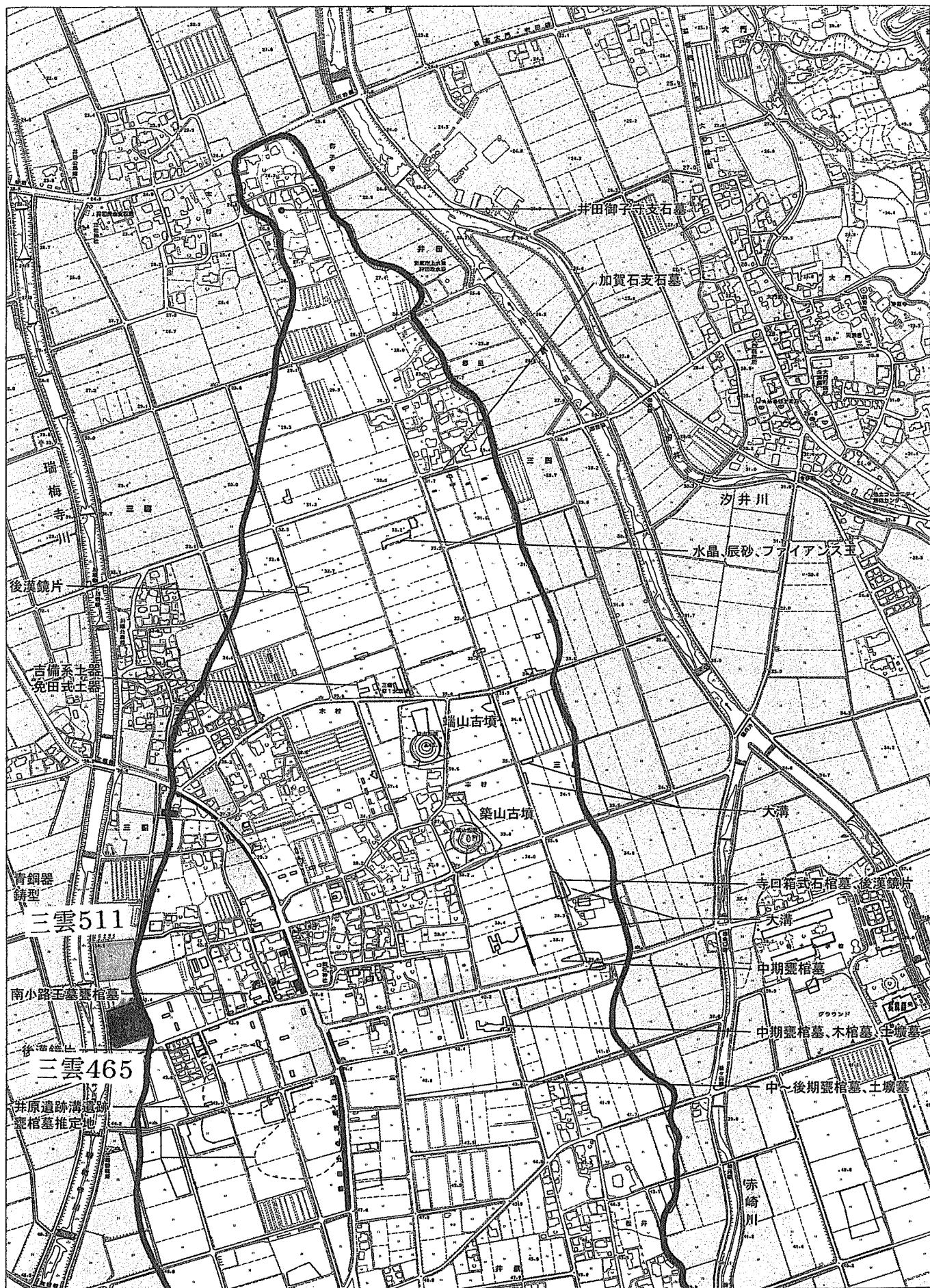
大溝から西に9mほど、段落ちから東に9mの地点で掘立柱建物が1棟確認されました。1間×2間の建物で北西・南東方向に主軸を持ちます。柱穴は大きく、1.2m×0.7m程度を測り、20cm程度の柱を用いて建てています。柱と柱の距離は南北方向で2.4m、東西方向で3.0mを測ります。

これまで、三雲・井原遺跡では10例程度の掘立柱建物が確認されていますが、いずれも弥生時代後期中頃～古墳時代前期（後2～4世紀）のものが主体でした。今回確認された掘立柱建物は弥生時代中期後半（紀元前後頃）の土器が出土しており、古い段階に位置付けられます。

この掘立柱建物の性格ですが、瑞梅寺川に隣接する関係から倉庫としての役割を考えています。現在、調査区北側を拡張し、遺構の確認を行っていますが、多くの柱穴が見つかり、複数の倉庫からなる倉庫群となる可能性もあります。なお、この倉庫の時期は三雲南小路王墓が築かれた時期とほぼ同じです。

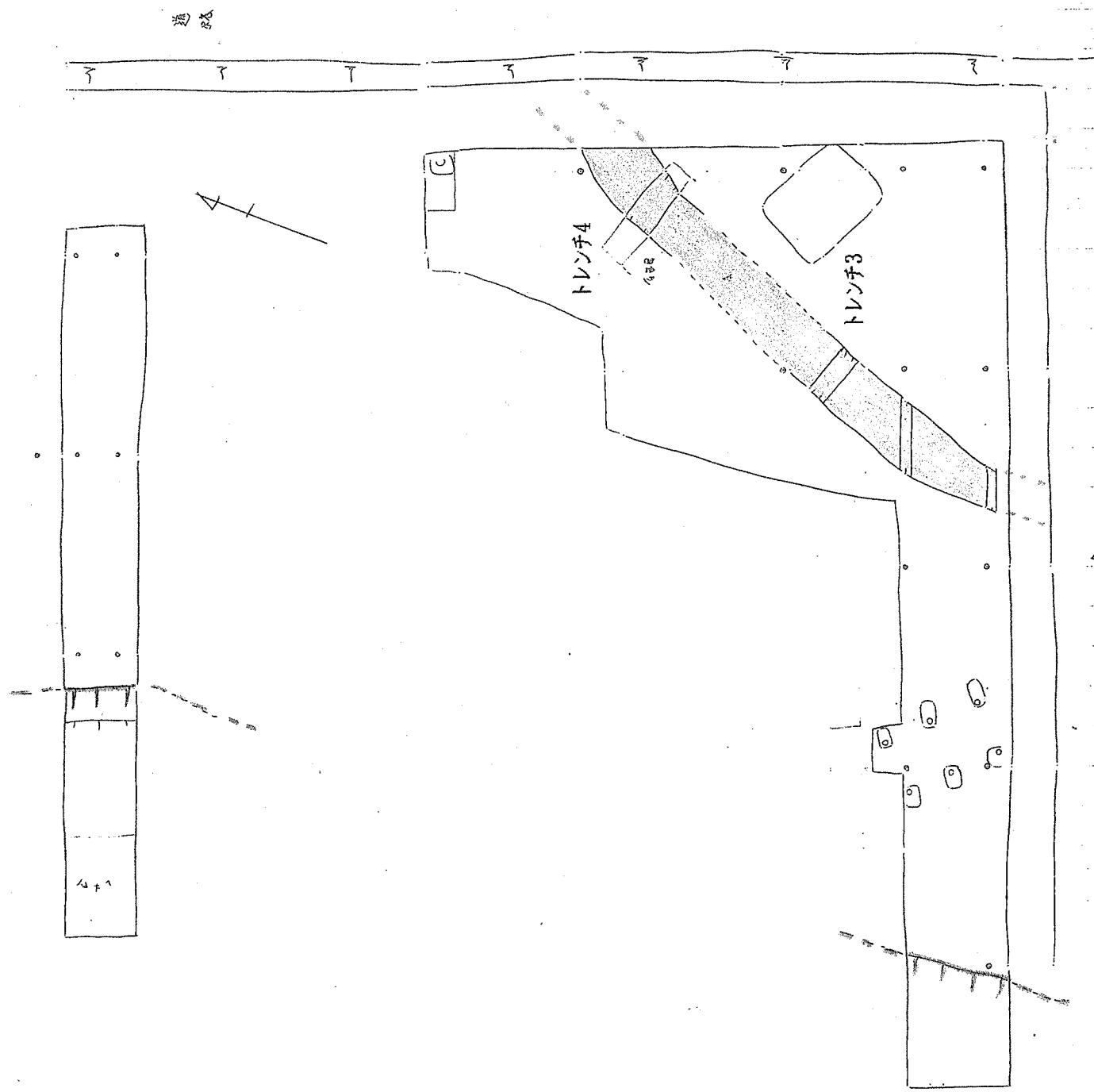
## 3. 今回の調査の意義

平成25年度の調査では、集落の西端部を確認し、掘立柱建物（群）からなる集落縁辺部の具体像が明らかにされた点は重要です。これまで三雲・井原遺跡の集落の構造については不明な点が多くただけに意義は大きいと思われます。

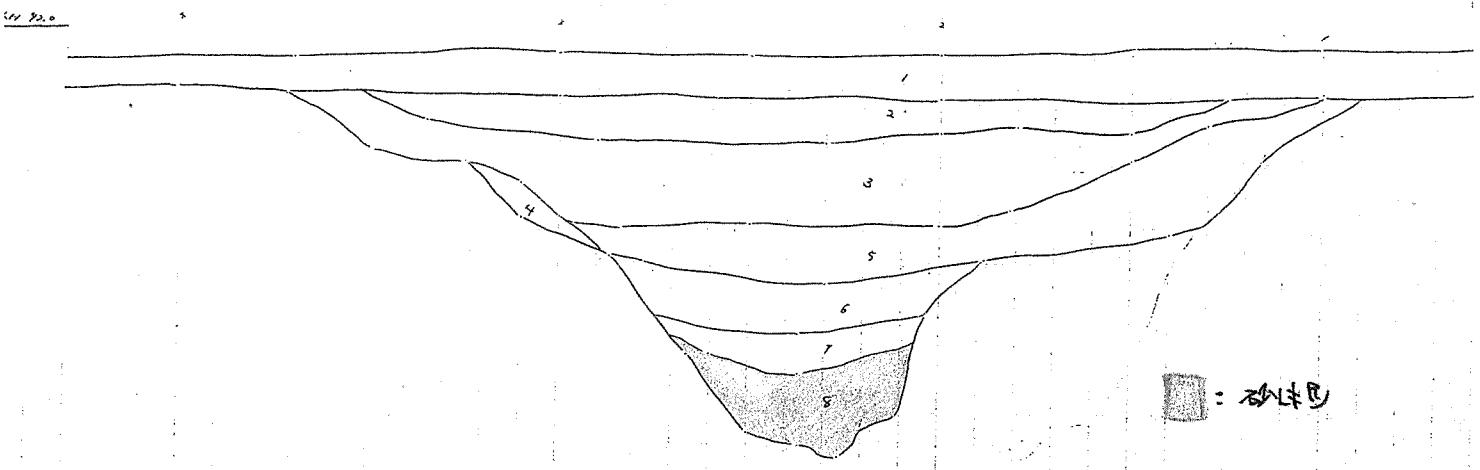
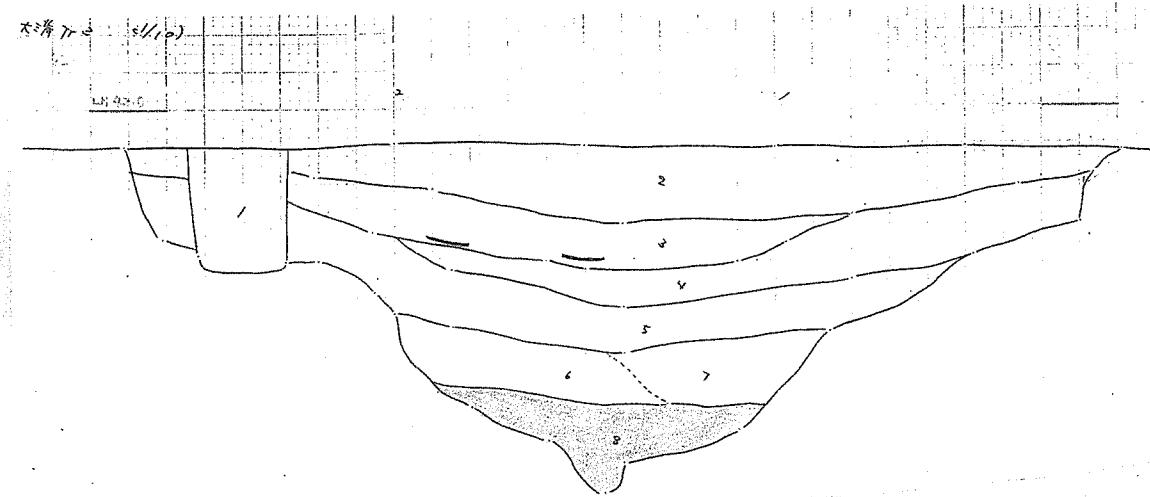


三雲・井原遺跡周辺主要遺跡分布図

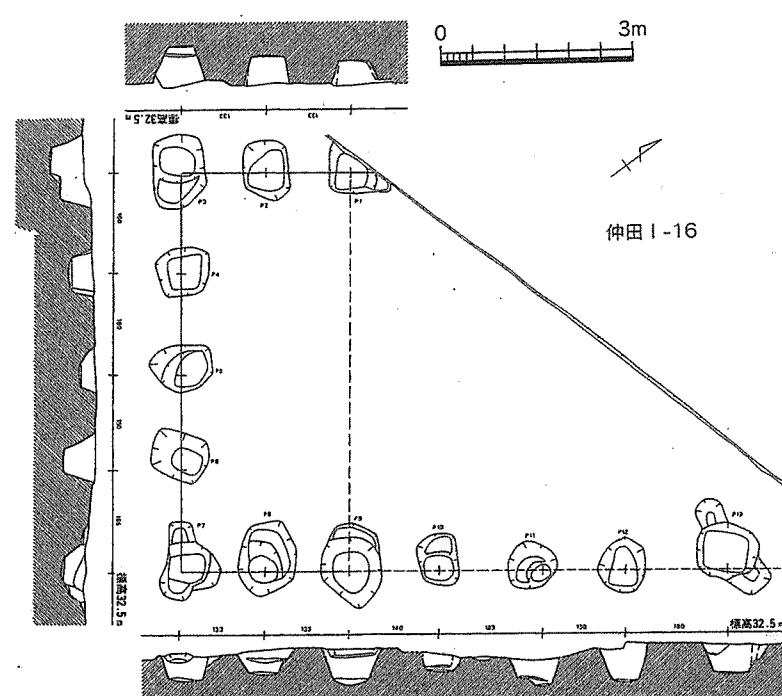
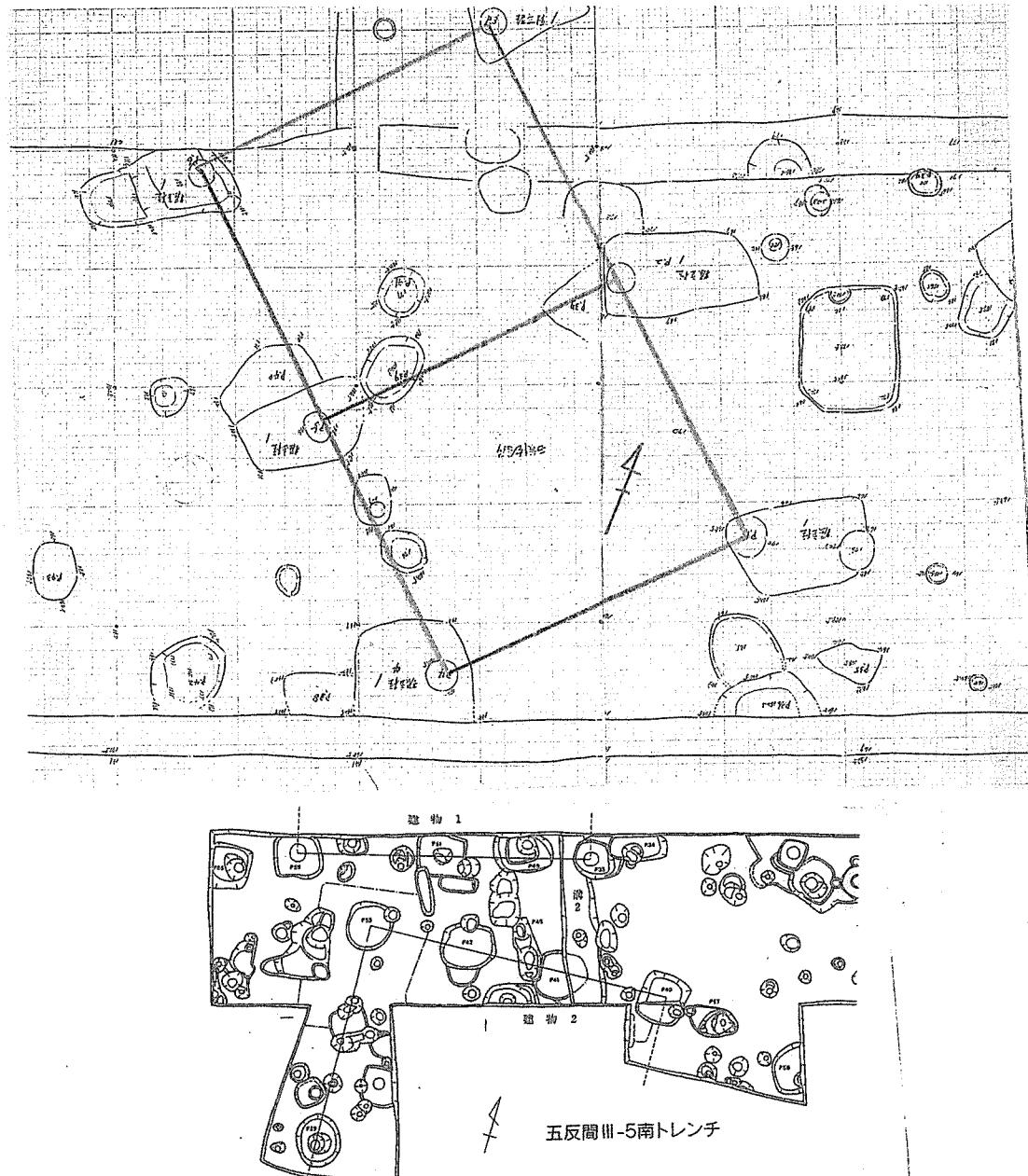
※白抜き部分は集落推定地



三雲465番地遺構配置図(1/300)



三雲465番地大溝トレンチ3・4土層断面図(1/20)



三雲465番地掘立柱建物実測図(1/60・1/120)

